

開催地名：新潟県関川村	
開催日時	令和2年10月25日（日） 10：10 ～ 11：00
開催場所	関川村 旧川北小学校
語り部	宮本 英一 （千葉県旭市）
参加者	関川村住民、自主防災会、役場職員等 85名
開催経緯	<p>当村は、洪水による浸水や土砂災害の危険区域と、高台で風水害の影響がほとんどない区域に区分されている特性があるため、防災や危機管理に関する意識に温度差がある。また、昭和42年羽越水害から53年が経過した現在、当時の被災経験者も少なくなり、若い世代に災害教訓を語り継ぐ環境整備が困難な状態となっている。さらには、自主防災会としての取組み、地区防災計画の策定は一部の集落を除き進んでいるとは言えないことから、今回の語り部講演を実施し、防災意識の向上を高めることとしたい。</p>
内容	<p>（1）はじめに</p> <p>私の住む千葉県旭市は、平成17年7月に、旭市、飯岡町、海上町、干潟町が合併してできた市である。人口は66,500人程度の農業と漁業の市で、醤油と漁業で有名な銚子市の隣に立地する。私は合併前、人口1万人程度の飯岡町の職員で、合併後は旭市の職員となり、平成23年3月11日の東日本大震災発生時には既に退職していて、地区の区長をしていた。</p> <p>津波で亡くなった方々や行方不明者の多くは、一度目の堤防を越えた津波が来た時には避難していて、もうこれで終わりだと思って家に帰ってしまい、二度目の堤防を越えた津波で流された方々が殆どである。津波の到達距離は海岸線から200メートルから300メートルで、旭市全体が津波に襲われたわけではない。従って、震源地である東北地方で起きた津波とはその規模や被害の大きさについては比べようがないが、震源地から遠い千葉県でも津波による大きな被害があった事を、是非知って頂ければと思う。</p> <p>（2）津波襲来</p> <p>地震発生後、近所の人たちは、荷物を持って、区民館や近くの神社に避難していった。私は「津波は家の前の堤防を越えることはないだろう」と思いながら、特に避難せずに、庭に立って海を見ていた。この日まで「津波警報」や「津波注意報」が数え切れない程発表されたが、大抵、数十センチ海水面が上がる程度だったこと、そして千葉県の九十九里浜は、リアス式の海岸と違って広い海岸なので、大きな津波は来ないと思い込んでいたことによる。</p> <p>そして津波は地震発生から約1時間後に来たが、私の予想通り、家の前の堤防は越えなかった。避難していた住民は安心して自宅に戻り、片づけを行って</p>

た。海岸では、潮がかなり沖合まで引いている状況が継続する中で、第一波から1時間半後に第二波が沿岸部を襲った。防災無線では「大津波警報、緊急避難、緊急避難、団長命令」という放送が、何度も流れていた。これは、消防団員に対しての放送で、団員も危険だから緊急避難をするようにという指示だった。私たちは、玄関の前に立ちながらその放送を聴いて、ただごとではないと思い、避難しようとしたが、あっという間に津波の激しい流れに巻き込まれて、水の中に沈んでいった。水を飲みながら浮き上がると、屋根の上に上って何とか助かった。

### (3) 震災での気づき

飯岡地区での津波の被害は、海沿いの数百メートルの地域に限定しており、それ以外の地域ではほとんど被害がなかったとはいえ、避難所は10か所開設されて、2,863人の市民が避難し、3日後の3月14日に4か所に統合された。その4か所の避難所生活は、仮設住宅に入居するまで73日間続いた。その一方で、通常の生活が可能な住民も多く存在し、区長として難しい対応に迫られた。

また、被害を受けた地域には多くのボランティアの方々が来てくれたが、申請や受付、保険加入手続きや作業現場への移動等に時間を割かれるため、作業時間が限定されてしまうケースが多く見られた。

災害は、人と場所を選ばず、突然やってくる。本日は防災訓練ということで、自主防災会や役場の方々が多くいらっしゃるが、皆さんやご家族が被災しないとは限らない。万が一そうなった場合、自分の家族を守りながら自分の職務を果たすためにどういった行動をとったら良いか、日頃から想定できる事柄について、十分な準備をしておく必要があると強く思う。



開催地より

被災体験に基づく貴重なお話を、大変興味深く受講することができ、防災意識の啓発に役立ったと感じた。災害がもたらす被災者の苦労、共助の重要性や行政との緊密な連携の必要性などについて考えさせられた。平素からの災害に対する備えやルール作り、良好なコミュニティ環境の重要性について考えていく必要を感じた。